William Faulkner の詩（4） 完

初期詩篇　17篇

森　田　　孟

本稿は，Carvel Collins, ed., *William Faulkner: Early Prose and Poetry* (London: Jonathan Cape, 1963) に基づいて，下記のフォークナーの初期詩篇17篇の訳出を試みたものである。初出誌を発表年共々記しておく。

「牧神の午後」L'Apres-Midi d'un Faune, *The New Republic*, Vol. XX (August 6, 1919)

「中国」Cathay, *The Mississippian*, November 12, 1919.

「サッフォー詩体」Sapphics, 同上 November 26, 1919.

「五十年後」After Fifty Years, 同上 December 10, 1919.

「喪われた婦人たちを歌う伝承詩」Une Ballade des Femmes Perdues, 同上 January 28, 1920.

「水の精ナーイアスたちの歌」Naiads' song, 同上 February 4, 1920.

「操り人形」Fantoches, 同上 February 25, 1920.

「月の光」Clair de Lune, 同上 March 3, 1920.

「街路」Streets, 同上 March 17, 1920.

「ポプラの木」A Poplar, 同上 March 17, 1920.

「クリメーヌへ」A Clymène, 同上 April 14, 1920.

「書斎」Study, 同上 April 21, 1920.

「母校」Alma Mater, 同上 May 12, 1920.

「ある共学の女学生に」To a Co-ed, *Ole Miss* 1919—1920, Vol. XXIV.

「ミシシッピー大の共学」Co-education at Ole Miss, *The Mississippian*, May 4, 1921.

「死にゆく剣闘士」Dying Gladiator, *Double Dealer*, Vol. VII (January-February, 1925)

「ファウヌス」The Faun, 同上 Vol. VII. (April, 1925)

牧神の午後

私は　歌を歌っている木々の間を縫って
彼女の　雲模様入りの流れる髪と顔と
どこか流れの眠っている処から輝き出る水の
ように欲情を唆る夢みる両膝を
あるいは，静かな　愛に疲れた空気の中を
ゆるやかに降り落ちてくる秋の木の葉を　追ってゆく。
彼女は立ち止る，そして悲嘆にくれる人がするように
風に吹かれてさすらっている髪を振り落して
顔を覆う，が　両眼は隠れない——
熱い素早い火花が，いちいち突然の視線が，
あるいは　飛んでゆく褐色の野生蜜蜂のように
甘やかに翔け回った，私の手足や首に
接吻の激しい濫費が。
彼女は施回し踊ってゆく　腕のように持ち上げ
揺れて　彼女を素早い影でまだらにする
木々の中を，すると微風が
彼女の小さい旋回している胸に横たわる。
今や彼女と手に手をとって私は行く，
幽霊の手のように蒼ざめて列また列をなす
処女の星々の銀色の西方の
緑の夜に，そして彼女が眠らないうちに
夕闇が彼女をつれてゆくだろう　静かな牧場(まきば)の
かすんだ深いとある流れのそばに——
星々を夢み，夢のうちに。

私は言いようもない程　行きたい思いに駆られる
どこか遙かな静かな真夜中へ
そこでは寂しく流れが囁き流れ
溜め息をついている　月に白晒れた砂地の上で
そして色白の血色のよい手足をした踊り手たちが旋回して過ぎ，

老衰して疲れた月が　溜め息をついている木々の
間を見詰める，すると遂に
彼女らの髪には露がきらきらと粉のように振りかかる。
彼女らの悲し気なゆるやかな手足と眉は
大枝の指から振りこぼれる
微風に乗って漂う花弁なのだ，
すると突然　これらの全ての上に
鐘を一打ちしたような何か大きな深い音が
鳴り降り，彼らは踊る　衣服をまとわず寒々と——
世界が年老いないうちに泉を求めて
破裂したのは　大地の偉大な心臓だった。

中　　国

ぎらぎらした砂が，あの目もくらむ砂漠の騎手たちが，さっと通る
昨日　高々と輝きながら軽帆船が
汝の黄金の過去を泳ぎ渡っていった処を。どの＜運命＞が予告するのか
汝の眠りが破られないように　もう風は
軽やかに吹くのだと。かつて汝の壮麗さが聳え立ち
その旗を空に輝かしく投げ上げた処を
今や空虚な年月が限りもなく
豊かに汝の亡霊と共に進んでゆく。その通りなのだ　＜運命＞の種子を
撒く者が＜死＞のための穀物を刈り取らせるのだ。

放浪者たちは　顔を槍のように鋭くし
羊の群や牛の群には　目的もなく　音を消した足取りで歩かせながら
汝の白く消滅した都会の通り通りを
きらめく王たちが通り抜けて行った処を漂い，そして年月は
彼らの背後の壁のように閉してしまった。それでも
さほど強力でない宿命の申し子をずっと
我々は凝視する，かつて汝の星々が燃えていた処で　これらと同様に
我々が信用を失わないように。彼らは汝を知らないし，

汝の不思議な帝国を見ようともしない，運命の手が
歌っている星々と聳えている黄金の丘の上に
流砂のカーテンを押し返す時に。

サッフォー詩体

その通りなのですが。睡眠が私の瞼にやって来ないのです。
私の眼の中にも，髪を揺すって　白い
よそよそしい蒼ざめた手をし，鉄の口唇と胸をして，
　そういう風に彼女は私を見るのです。

それでも　睡眠は私にやって来なくても　来るのです
幻影は，睡眠のふっくらと滑らかな眉から，
已れ自身の髪に縛られることなく動いてくる
　真白いヴィーナスが。

彼女を引き付ける鳩たちの紫の嘴然として，
嘴は欲望もみせず真直ぐで，首は傾いていた後方へ
レスボス島と　愛の神々の飛びゆく足の方へと
　彼女の背後で泣きながら。

彼女は振り返らない，彼女は振り返らない　九人の
王冠を戴いた詩神がアポロンの周りで
澄み切った夕べに歌を歌っている九本の
　コリント式の柱のように立っている処へは。

彼女は見はしない　女性の同性愛者たちが歌うことに酔って
リュートの弦越しに口から口へと接吻し合っているのを，
また　海の妖精オーケアニスの白い足が
　輝いており，サンダルを履いていないのを，

彼女の前には　泣き叫びと悲嘆の声が起る

不毛の女たちの，翼をもった雷の，
その間，見棄てられた忘却の河の女性の亡霊が　嘆きながら
　薄明を硬直させる。

五十年後

彼女の家は空っぽで　彼女の心は老いて
彼女しか欺けない物陰と反響で
一杯になる，というのも　彼女は編もうとするからだ
やみくもに曲った指で，物を捉えられない網を。
かつて男という男の腕が彼女に差し出され
彼女を抱擁せんと白い鳥のように宙に留ったという話だ。
彼女が所有できる筈だった王冠は　結った髪の一房一房を
束ねなければならなかった，そして彼女の甘美な両腕は<魔女の黄金>を。

彼女の鏡は　彼女の白さを知っている。そこで
彼女は　夢みながら立ち上ったのだから，柔らかな髪を頭の頂にみせて立って
　いる時
彼女に優しさを添える他の夢から醒めて。
それで彼は心を縛られ　若々しい眼を俯けて
何も見えなくなって　彼女の存在を発せられた匂いのように感じ，
その罠の中に肉体も生命も丸ごと捉えられてしまうのだ。

喪われた婦人たちを歌う伝承詩（バラード）

「だが　去年の雪　今いずこ」

私は　緑のたそがれ時に歌う
たわいもなく
私が愛してきた婦人たちのことを
――ナンデモアリマセン／アア，魅力的，魅力的

銀のサンダルを履いた恋人たちの華やかな小さな亡霊となって
彼女らは私のリュートの弦にのせて　素早い足の動きで踊る
寄宿学校の処女たちの奔放さをみせて
そうこうするうち　招かれざる蚊どもが
私の白い後宮に惚れ込んで
彼女らを訪れる　音なき恋歌と共に
霊妙な誑し込みのようなものだ。

彼女らは聞く，ああ
我が婦人たちよ
そして私の口唇に　ささやかな幽霊のような接吻で触れる
こっそりと　一人ずつ
去ってゆきながら，彼女らの小さな燃え輝く顔は
どこか風に吹かれている夢の庭から　薔薇の中の
彼女らの愛の夜へと向かうアネモネのように

私は年老いて　一人ぼっち
それで　彼女らの翼から降る星屑が
私の眼を霞ませてしまった
私は緑のたそがれの中で歌う
喪われた婦人たちのことを——実＝　全ク魅力的，魅力的。

水の精ナーイアスたちの歌

汝ら　悲しめる者よ　来たりて我らとここに
結婚の眠りにつく約束を果せよ，
静かな月は　我らの上にかかり
震えるさざ波は我らの上に，
我らの腕は　流れと同じように柔らかい。
来たりて我らと共に　我らの眠気を催す夢を護れよ
落胆した者たちよ，もし汝ら悲しくば
もし汝ら悲しみの衣服を

まとっているなら　来たりて我らと共に眠りにつこう
かすかに深く波動しながら，
そこでは日光が広がり　震えながら　落ち着いて
その指で黄金の夢想をしながら
我らの輝く髪の中を引き回す
そこに深々とした満足を見い出しながら。

汝ら　悲しめる者よ　眠醒めて
もはや泣くなかれ，歌いながら
彼が開いた薔薇の中に蜜蜂が
飛び込むように来たりて　我らに
没頭せよ。ここで我らの口は開くのだ
花がその黄金を露(あらわ)にするように。
我らの口は柔和だ　塀を高く巡らせた庭で
育つどの薔薇とも同じように，
庭は　日光が一杯に満ちた
コップのように水平である。

汝ら　悲しめる者よ　来たりて眠れ
木々の間で囁く風の
吹き渡る下を我らの腕の中で，
そして静かに踊る踊り手たちの
悲しい贅沢の中を
微風に囁く大枝の中で。
牧神が溜め息をつき，彼の笛が鳴り響く時
上の大空と下の大地は
静かなたたずまいで　彼の調べに聴き入る
そして溜め息もつくのだ　丁度雨が
遠方の涼しい森の細道でそうしては
木の葉の浮く水溜りで夢みるように。

汝ら　悲しめる者よ　来たりて我らとここに
結婚の眠りにつく約束を果せよ，

我らの眼は　薄明りの流れのように柔和で
我らの胸は　絹の夢のように柔和で
たそがれ時の白さだ，我らの胸　寝台は
その上で我らが　ずきずき痛む全ての頭を癒すのだ
房々した芳しい髪の中で互いを結び合せながら
彼は遂には　全ての忘却へと滑り込む
その間　夜は溜め息をつき囁くのだ　空
一面に星々を撒くことで。
汝ら　悲しめる者よ　来たりてここに
際限なき夢と眠りの中に留まれ。

操り人形

ポール・ヴェルレーヌへ

スカラムッチャとプシネラよ
芳醇な夜に影を
投げて，空に向かつて接吻せよ

するとボゴナの医者は
頭蓋帽と着物を着て
薄青い食い入るような眼で　薬草を探し求めるのだ

彼の娘が肌も露に
狭い己が寝台から震えながら滑り出て
月の中で待っている恋人に会いにゆく間

彼女の恋人はカリブ海沿岸地方の出で
その熱情が彼女を　ある緊張でぞくぞくさせるのだ
月ハ如何ナル恨ミモ抱カナイ

月 の 光

ポール・ヴェルレーヌより

君の魂は美しい庭なので
仮面舞踏会とベルガマスクが　魅力的に行われる，
リュートを奏で，踊り，そしてまた
彼らの偽装の特権*の下に悲し気にも。

皆は勝利者の短調で
時機を得た愛と生を歌っている，
だが　自分たちの楽し気な歓楽を疑っているようだ
自分たちの歌が月光に溶け込む時に。

細っそりした木々に宿る鳥たちに夢みさせる
程に美しく晴れ上った穏やかな月光を浴びて
泉は辺りの彫像の間で夢みているのに
弱々しい泉は　銀色の恍惚状態ですすり泣く。

（*「特権」と訳した語は発表誌では“fanchise”となっていて，これは恐らく“franchise”「特権」のタイプミスであろう，という編者コリンズに従った。尚，彼は，同じ注で，それでも，この詩では，ここだけが韻を踏んでいないので，読者はこの語を“fantasy”「空想」のような語と取り換えて読んだ方がよさそうだと述べている。）

街　　路

ポール・ヴェルレーヌより

ジグ舞曲を踊れ！

私は彼女の可愛い眼が好きだった
星空よりも美しく
意地悪な狡猾さに輝いていた

ジグ舞曲を踊れ！

彼女には貧しい心を涙で
満たすあの甘美な微風があった
ああ，何と本当に魅力的なことだったか　彼女の様子は

ジグ舞曲を踊れ！

だが　この慰めは私のもの
彼女の口に接吻して　今では
私の心は　彼女には聞こえず見えないのだと判るのは

ジグ舞曲を踊れ！

彼女の顔は　私の心の
無限さの中にずっと在ることだろう
彼女は貨幣を割り　それを半分私にくれた

ジグ舞曲を踊れ！

ポプラの木

どうして君はそこで震えるのか
白い川と道路との間で。
君は寒くはない
太陽の光が君の周りで夢みているのだから，
それでも尚　君はしなやかな哀願する腕を持ち上げるのだ，あたかも
君の細っそりさを隠さんと空から雲を引き出して。

君は若い娘であり
我を忘れた慎重な激痛で震えている，
衣服が無理矢理　彼女から取り去られた
白い外界の娘なのだ。

クリメーヌへ

（ポール・ヴェルレーヌより）

神秘的な弦
言葉なき歌
最愛の人よ，何故なら君の眼は
空の色だから。

何故なら君の声が　私の視力を
逸らし，その理性の
水平線を混乱させ
騒き回すのだから。

何故なら君の隠された細さが
白鳥の優美な白さ同様
私の魂の部屋を
君の芳香で充たしたのだから。

何故なら呼吸し，また　見る際の
私の存在の全ては
あなたの時間の
花々のような名残り惜しさなのだから。

私の心の中と　入口とで
踊る光輪
そのようにそれはずっと在るだろう
無限に。

書　　斎

どこかでは　細っそりした声なき微風が吹いて

震えるポプラの木々の腕を解くだろう，すると
水の流れる処で　交錯しているだけの袖で遮られるのだ，
太陽の当らぬ流れは静かで深いので　夜明けに
そこで休止する乾き切ったハンノキの渇を癒す。
（シーッ，さあ，シーッ。私はどこに居たのだろう？　ジョンソンよ）

どこかでは　燭蠟の溶けて垂れた蠟の黄金が
小屋の壁の上に綴織を織り
彼女の黄金の髪は　簡素に巻き重ねられ，
それで私の方は　全く他の事は考えも及ばない
彼女の眼の静かな水溜りの中の日没以外は。
（働け，働け，愚か者の君よ！――）

どこかでは　森の中で迷ったムクドリモドキが
その黄金の針金で補強された喉を震わせてさえずる，
道の中には　彼の芳醇な調べで震える銀の
頭巾をかぶったカンバの木々で真白いのもある，
まるで恐怖にかられているかのように喘ぎながら震えている，
そこに　おずおずとスミレが最初に姿を現わす。

（彼らにとって音なき夢は　私には
厳しい科学。試験は近づいており
私の思考は制御のしようもなく
さまよう，それで私には聞えないのだ
私が働かねばならぬのだと　私に告げている声が，
全ては私が死んだ時と同じだろうから
何千年も。私の上半身が全て
頭だったらなあ．）

母　校

我らの眼と心とは全て　汝を見上げる，
ここでは　我らのあらゆる声なき夢が　汝の壁と壁との間で

織られるのだから，威厳に満ちて静かに，
汝の正門の中で生命が始まったそれらの夢の
精神によって与えられたものだ。それらのお陰で
我らには見えるのだ，山の頂上で輝く太陽の
成功を，我らを無限に上方へと
引張りながら，遂には〈人生〉と〈仕事〉とが一つになる。

始まりであって終りではないのだ，これは。
それから先は，彼女の不断の感謝の祈りによって
何ものも拭い消せない記憶が
我らの心の中に確かと坐を占める。接吻すること
——抱きながら，そして彼女に優しい抱擁で抱かれて——
別れに際して　彼女の親切な穏かな夢みる顔に。

ある共学の女学生に

黎明そのものも　優雅に完成された他の女性たちの中の
君以上の美しさを身に着けられまいし
君の明るい甘やかな髪によって黄金の影をつけられた君の顔以上の
麗しい顔を　賢者たちもこれまで知らなかったことだろう。
ヴィーナスも君ほどに天上の美しさは見せないだろう，
君の眼の明りの灯つた隠された静寂，
そして喉，静かな応答の歌うたう鼻梁，
細っそりした鼻梁，だが全ての夢は　そこで宙に舞う。

ぼくはヘレンの眉から　心を動かされずに顔をそむけることが出来ただろう，
彼らのベアトリーチェに　何の美も見い出せなかったのだから，
彼らのタイスは　当時　今ほど美しくはなかったようだ，
尤もアテネと交換に　彼女の接吻を得ようとした者もいたようだったが。
幽かな美しい遠方の　時のアラス織を下方に求めて
君の顔は尚も　孤独な昼のように合図をする。

ミシシッピー大の共学

アーネストが言う，アーネスタインに——
あんたはぼくの小さな女王——おお，
　　あんたは世界中で
　　ぼくの心臓を
浅ましい程打つ娘だ——おお，
　　夜も昼も
　　あんたが居ない時
あんたの美しい顔がぼくの頭を一杯にする——おお，
　　そしてあんたはぼくを愛してくれる
　　ぼくがあんたを愛しているように
グレトナ・グリーンへ行こうじゃないか——おお。

死にゆく剣闘士

何たる悲しみか，恋人よ，風と雨降りが眼醒めているのは。
人間の生命は　雪と雪の季節の間の
明日なき四月にすぎない。何たる悲しみか
冬が再び彼の頭の辺りに発生するのは。

人間の生命は短く，長居もしない。神々よ！
何たる四月が，カイアよ，若々しく白い汝を知っていたことか！
汝の羊飼いの若者は　他の土塊の中の土塊である彼に
魔術をかけるような新しい機敏さを備えていたのだ。

これは若者であり，世界は星と丘，
ローマは一つの木霊にすぎず，我々不死の者のことに心を乱されはしない。
松明は前より少くなったし　トランペットは正門の処で高く昇ってゆく
彼の血を炎へと鳴り響かせながら，炎は振りこぼれるかも知れないが。

何たる悲しみか，恋人よ，青銅の時代の青銅は
そして生命は　皇帝の身振りにすぎない，
死は　一人で今わの際にある彼女を喜ばせられる女主人，
死にのぞみながら彼は　彼女の要塞を奪取するかも知れない。

もっと儚いのだ，恋人よ，もっと儚いのだ，四月や若さの
あらゆる苦痛よりも　花輪と木の葉と燕は。
何たる悲しみか，恋人よ，余地のための野が休閑地のままなどとは。
何たる悲しみか，恋人よ，雨後に旱魃を求めるなんて。

ファウヌス

H. L.へ

三月がのろのろしていると　ファウヌスが足を踏みつけて
木の葉を鞭で鳴り響かせ　さざ波立てる。五月が
むなしく追い求めて　木の精ドリュアスの先触れを告げた，物音を立てず
だが　春の湿った横腹を孕ませはせずに。

弱々しい葉の縁の板狭みの中で
彼の喘いで当惑した心は　苦痛で打ち拉がれて見境がなくなる
風の歌っている回廊を走り抜けんとして
歩調を乱して五月の手へと欠け急ぐ月々を形作って深く悲しむ，

かと思うと　激しくぴっしりと葉となって留まって
彼の苦々しい親指を味わわんとして，それで遂に五月が再び
野生の蔓のほぐれゆく傍を裸で去ってゆきながら唆すのだ
彼女の胸の上で音楽を奏でている葉を剝ぎとり
口唇をつけられていず，夢みられたことがなく，臆測されたこともないコップから
あの，甘やかな太陽を受けた葡萄酒をすすってユービテルを喜ばせよと。

*

本稿は，既刊の，筑波大学文芸・言語学系紀要「文藝言語研究・文藝篇」13（1988年2月刊），14（1988年9月刊），15（1989年2月刊）に，連載した「William Faulkner の詩」（Ⅰ.『ヘレン・求愛』*Helen*：A *Courtship* 全訳 Ⅱ.『ミシシッーピ詩篇』*Mississippi Poems* 全訳），「William Faulkner の詩（2）」（Ⅰ.『大理石の牧神』*The Marble Faun* 全訳，Ⅱ.『緑の大枝』*A Green Bough* 全訳），「William Faulkner の詩（3）」（Ⅰ.『春の幻想』*Vision in Spring* 全訳，Ⅱ.『操り人形一家』*The Marionettes* 全訳）に続くもので，これでフォークナーの刊行された全詩業の訳出は終了した筈である。

フォークナーの詩業をつぶさに凝視して今感じられることは，彼が自らを指して述べたあの「挫折した詩人」"a failed poet" なる語が，文字通りにも，また，フォークナーが意図したであろう逆接的・自負の意味においても，共に同時に，首肯できるということであろう。どう贔屓目にみても，フォークナーの詩業を秀れている，などとはとても言えまい。彼の詩作品は，新しいというには古すぎ，古いというには新しすぎたのである。

彼を秀れた詩人とはどうしても言えないが，同時に，それにも拘わらず，フォークナーをして自らを「挫折した詩人」と評させた程に彼が，前小説家時代に（そして小説家に〈変身〉して秀れた作品を何作も書き上げた後も相当程度に）詩作に打ち込んだこと，また，打ち込まざるを得なかったことこそ，彼を大小説家にした重要な〈秘密〉だと思われるのだ。フォークナーの代表作の『響きと怒り』や『アブサロム，アブサロム！』，あるいは，今日に到るも尚斬新な技法の『野生の棕櫚』，『我，死の床に横たわりて』，『尼僧への鎮魂歌』など，また，今も問題大作であり続ける『寓話』等は，「挫折した詩人」にして初めて可能となった業績だったのである。

新しいというには古すぎ，古いと見るには新しすぎる，というフォークナーの文学上の特質が，専らマイナスに働いたのが彼の詩作品であり，全面的にプラスに働いたのが，彼の成功した小説作品であった。

本稿は冒頭にも記したように，Collins 編のフォークナーの初期散文・詩集から17篇を訳出したものであるが，この編著には他に2篇の詩が集成されている。"Nocturne"（同書pp.82—83，初出は *Ole Miss*，1920—1921，Vol. XXV）と，"Portrait"（同書pp.99—100，初出は *Double Dealer*《New Orleans》Vol. III，june，1922）であるが，前者は『春の幻想』*Vision in*

Spring の［III］「世界とピエロ：夜想曲」 "The World and Pierrot, A Nocturne" の ii と，後者は同書の［V］「省像」"Portrait" と殆んど同じ作品で，それらは既に，「文藝言語研究・文藝篇」15,（pp.66—67, pp. 74—75）に訳出ずみなので，本稿では除外した．テクストに若干の異同があるので，『春の幻想』所収のものと，コリンズ編のものとの違いを以下に（→で）記しておこう．（イタリックスは本稿の筆者）

"Nocturne"

before the moon → *upon* the moon ／ on *the* dark → on *blue* dark ／ tapers → taper ／ The sky *desert* with …→ The sky with ……／ *White* and stark → *bright* and stark

"Portrait"

第1スタンザ Lift → Raise ／ *dimly raise* your face → *to* your face ／ *from* your eyes → *on* your eyes

第2スタンザ falters → scurries ／ While → And

第3スタンザ *raise* your *face* → *lift* your *eyes*

第4スタンザ Yet → And

第5スタンザ bright → dim

第6スタンザ *from* your eyes → *on* your eyes